赤のマフラー/銀魂/沖神

槻夜 七瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤のマフラー／銀魂／沖神

【Ｎコード】
Ｎ２３７３Ｆ

【作者名】
槻夜　七瀬

【あらすじ】
七月上旬。神楽は何週間か前から何かを隠しているらしい。何かと心配していると、いきなり紙袋を持って出ていき、誰かを捜していて……。

（前書き）

ＰＶ１０００突破ありがとうございます！

……それは何ヶ月か前。
どこもかしこも暑く、皆が項垂れていた7月上旬。

「なぁ、オイ」

「何アルか。今手が放せないネ。邪魔すんなヨ」

そう言いながら、神楽はなにやらもそもそと手を動かしている。

「何してんだよ？　幾ら仕事がなくて暇だからって、変な遊びに手

ェ出すなよ？」

手元を覗き込む銀時。

視線に気付いて、彼女は体勢を変え、壁を作った。

「変な遊びって何ヨ。私は遊んでなんかないアルよ」

不意にカレンダーを見上げた。

――7月7日。

「…」

視線を手元に戻したかと思えば、猛スピードで自分の部屋へ駆け込んだ。

「……俺、何か悪いことしたっけ？」

一人になって、銀時は呟いた。

――急がなければ。

もう、明日に迫っているのだから。

「神楽ちゃーん？　お昼ご飯出来たよ、一緒に食べよう？」
新八が出勤してきたらしい。
朝はいなかったハズだ。
「今、手が放せないネ！」
「は？　何してるの、神楽ちゃん」
「るっせぇんだよ、駄眼鏡が。オメーはあの天パーと二人でしょぼしょぼ昼飯食ってろや」
「標準語なんですけど。つーか何でいきなりキレてんの」
「暑さでイライラするネ。チクショー、どこもかしこもどうしてこんなに暑いアルか」
「…夏だからね」
「早く行けヨ」
「扱い酷くね？　泣いて良い？」
それきり、彼女から返事が来ることはなく。
しょぼんと、新八は銀時の居る居間へ行った。

「あぁ？　神楽が可笑しい？」

炒飯を口に運びながら、銀時は声を上げた。

「んなのいつもの事だろーが」

さっぱりとした味付けの炒飯は、勿論余り物をフライパンに突っ込んだだけである。

「いや、いつもよりもっと冷たいっていうか…。何か隠してるみたいなんですよね」

「隠してるぅ？　あいつまた変なモン拾ってきたとか言わねぇだろーな」

「物音は殆どしないんですよ。だから動物とか、そんなんじゃないと思います」

「でもよォ、あいつ一応少女って設定じゃん？　流石に見知らぬ男と一つ屋根の下で生活してて、しかもその男が少女の部屋に踏み込むってなったら、色々ヤバいんじゃねぇの？」

「無駄に例え長くないですか」

スプーンを置き、無言で考える新八に、興味なさげな銀時だった。

そして、その日の深夜。

「出来たァっ！」

完成したそれを、神楽は広げ、歓喜の声。

「ま、間に合ったネ…これで渡せるアル」

ぱたりと仰向けに倒れた。

翌日。

「あ、おはよ神楽ちゃん」

「おはよっ」

今日は朝から来ていた新八は、恐る恐る挨拶をした。

けれど昨日よりも機嫌の良さそうな神楽が明るい声音で返すと、拍子抜けしたように目を見開いた。

「じゃあ、行ってくるネ」

「行ってらっしゃ――…え！？　ちょ、神楽ちゃん、どこ行くの！？」

「……散歩ネ！」

大きな可愛らしい紙袋を抱えた神楽は、嬉しそうにぴょこぴょこ歩きながら、辺りを見回していた。

――いない。

あのベンチにもいない。

…じゃあ、あの河原？

「！」

「……ん？」

「…サドッ」

土手の下にいた沖田は、声のする方を見上げた。

「……あぁ、チャイナ。どーしたんでィ、傘も持たずに」

この炎天下で、日の光に弱いはずの彼女は、いつもの日傘を持たずに此処まで来ていた。

「え、あ、そーいえば忘れたネ」

「ぶっ倒れんなよ。俺ァ面倒見ねぇぞ？」

「お前になんか見てもらいたくねーヨ」

いつも通りの憎まれ口をたたき合っていると、うっかり本題を忘れてしまいそうになる。

きゅっと、神楽は紙袋を抱える手に力を込めた。

「……サド、あの…これっ……」

「あ？　何でィそれ？」

投げつけた紙袋は沖田に命中する。

「痛ェ！　何しやがんでィ！」

「早く見るヨロシ！」

「何なんでィ…ったくよォ」

似合わないくらい可愛らしい紙袋を開けると、中には真っ赤な何かが入っていた。
沖田はそれを引っ張り出す。
「……ま、マフラー？」
それを聞いて、神楽は胸を張る。
「すごいダロ？　何週間もかけてやっと昨日出来たアル！」
きょとん、と彼女を見上げる。
「…何で？」
「おまっ……忘れたアルか！？　今日は7月8日ネ！」
「7月8日？　――…あ、俺の誕生日？」
「疑問符付けんな！　折角、私が作ってきてやったのに…」
「つっても、マフラーだしねィ」
「ま、マフラーの何が悪いネ！？」
「何が悪いって…夏ですぜ？」
「……あ。」
「あ。じゃねぇ！　暑いだろ、こんなの、どー考えたって！　しかも超長ェし！」
「おおお、怒ることないダロ！？　私はこれが精一杯だったアル！」

「精一杯って……」

はた、と目を見開く。

――ああ、ヤバい。

顔が熱い。バレてしまう。

こんなに嬉しいなんて、こいつにだけは絶対に悟られたくない。

「…姐さんの助言だろィ」

「うん。姉御に訊いたら、マフラーは定番だって言ってたヨ」

思わず笑ってしまう。

「何で笑うんだ」と彼女は怒るのだろう。

それがまた嬉しくて、愛しくて。

顔の赤さを見られたくなくて、それでももっと彼女を近くに感じたくて。

そっと、抱き寄せた。

「うぉ」

素っ頓狂な声を上げる神楽を笑わずにはいられない。

自分の気持ちを誤魔化すために、耳元でそっと囁いた。

その言葉を聞いた途端、彼女の顔が真っ赤に染まったのは言うまで

もない。

「――――ありがとなァ」

そして、肌寒くなってきた今日この頃。
人気のない公園に、長いマフラーを巻いた二人がいた。

「……動きづらいアル」

「これなら寒くねぇよな」

あまりに長すぎるマフラーは、二人で巻くと丁度良い。
勿論、沖田の言葉である。

「いやぁ、夏には役に立たねぇけど、これからの時期はぴったりだ

ねィ」

「役に立たないは余計ネ」

「嬉しーんですよ、俺ァ、これでも」

「…顔に書いてあるヨ」

「はは、バレちまったねィ」

誤魔化すように、マフラーをぐいと引っ張り、あの河原へ歩き出した。

「ねぇ、あの時の言葉、もう一回言ってヨ」

「は？　言うかよ」

「忘れちゃったネ、なんて言ってたか」

「仕方ねぇなァ。もう二度と言わねぇから、よぉく聞いとけよ」

冷たく、澄んだ空気が一気に肺に流れ込んでくる。

「好きだ」

――このマフラーを通して伝わるのでしょうか。

心臓の高鳴り、君への想い

好きだけじゃ足りない、大きくて暖かいこの気持ちは

今はまだ照れくさいから

いつか伝えることにします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2373f/

赤のマフラー/銀魂/沖神

2010年10月28日03時31分発行